第６回日本母親大会で被害児の状況を訴えたお話を聞いて！

岡山県本部

６０年記念行事〔２０１４（平成２６）年１０月２６日〕に、渡辺みさをさんの呼びかけで参加していただいた岡田文子（以下文子さん）さんから、お母（幸子（ゆきこ））さんが第６回日本母親大会〔１９６０（Ｓ３５）年8月２０日〕に行かれた事をお聞きし、是非お目にかかって当時の話をお伺いしたいと思っていました。先日、その念願がかない、春木・真田・平松・森脇の４名は、２０１５（平成２７）年6月１３日（土）１３時、ＪＲ新倉敷駅で文子さんと待ち合わせをし、ご自宅（浅野家）を訪問しました。当日はちょうど田植えの最中で、弟〔浅野雅弘（以下雅弘さん）〕さんにはたいへんご迷惑をおかけしました。

現在住まれている家は、文子さんが中学校２年生のとき〔１９６９(昭和４４)年ころ〕、本家から分かれ普請したものですが、浅野家は事件当時、船穂町でも瀬戸内海が見えるほど高い場所一帯で農業を営む豪農でした。ご両親は、ぶどう・桃・葉たばこなどの栽培で忙しく、お母さんは赤ちゃんが生まれる臨月まで桃の袋かけをされていたそうです。

今年の春、亡くなられたお父さんは、井原市高屋町で生まれ育った方で、興譲館高校から予科練の特攻隊兵に志願して、静岡の航空隊へ入隊していましたが、終戦後岡山に帰ってきて、卒業証書をもらったそうです。終戦から４年後、お父さんが２４歳、お母さんが２０歳とき、遠い親戚であった事が縁で知り合ったふたりは、お父さんからたびたび送られた、短歌の入った恋文がきっかけで結婚し、お父さんがお婿さんとして浅野家に入ったそうです。

文子さん・雅弘さんは、１９５５（Ｓ３０）年5月１８日、産婆さんに来てもらって自宅の２階で生まれ、産婆さんから「あっ！もう一人おられます。」と言われ、お母さんはたいへんびっくりしました。文子さんが先に生まれて（生まれたときの体重は通常の赤ちゃんより少し小さいくらい）、続いて男の子（雅弘さん）が生まれましたが、育たないかもしれないと言われたくらい雅弘さんは非常に小さかったそうです。

お母さんはまったく母乳が出なかったので、牛の乳やヤギの乳も飲ませましたが、双子でもあり、量が不足し評判の良かった森永粉ミルクを信じて使用しました。生まれたばかりの赤ちゃんが、ひ素入りのミルクを飲んだことから、症状がひどくご両親はふたりの赤ちゃんを、何としても元気な子に育てたい。その一心で、岡山医大付属病院、倉敷中央病院など良いと言われる病院に連れて行き、診察を受けました。倉敷中央病院には自転車の荷台にばかん籠（竹で編んだ大きな四角い籠）を縛りつけて、その中に赤ちゃんを載せて通ったそうです。当時の子供の状態は、幼稚園に上がれないほど重症で、雅弘さんは背髄から水を抜く治療をたびたび受けるなどいろいろあり、口ではうまく言えませんが、親としてかわいそうで・かわいそうで子供を見るのが辛かったそうです。病院への通院に疲れ、長らく二人の子供と一緒に新倉敷駅前の浅野病院へ入院したこと

もあり、流れる川でおしめを洗い、七輪でおかずを煮炊きし食べる毎日でした。また、病院では家族の入るお風呂を使用させていただいたり、夜二人の子供の寝顔を見に来てくれる親戚の方もいて、ありがたかったそうです。文子さんは小学校２年生のとき、朝起きたら顔がはれていて、祖母から「虫に刺されたんか？顔がえろうはれとる。」と言われ病院に行ったら、腎臓が悪いと言われたことを今でもよく覚えているそうです。

岡山県森永ミルク中毒の子供を守る会（以下守る会）発足当時は、岡崎哲夫さんが中心となって活動されていました。婿取りだったお母さんは自由がきいたことから、たびたび子供を連れて岡山市番町の岡崎さんの自宅を訪問し、会合に参加しました。　岡崎さん宅へは何組かの方が寄っておられました。集まった人たちは、皆仲良しで吉房さん（ふっくらしていてお姉さん気どりの方）とは子供同士文通をしたり、泊まりに行き来するなど、特に仲好くさせてもらいました。矢掛から来られていた、岩月祝一さんは「この問題は一生かかっての問題だ」とよく言っておられたそうです。

守る会は、全協解散後も岡山県衛生部及び森永乳業に、被害者の継続的な精密検診とひ素ミルク中毒の予後診療や研究を実施する指定医療機関の設置等を要求しました。１９５６（昭和３１）年、岡山県では7月１６日から県下１０病院で精密検診が実施され、１３３７人の被害児が受診しましたが、県衛生部は〔1956（昭和 31）年 11 月 28 日〕精密検査の結果について（県衛生部、医師会、岡山大学と三者会議を実施）「小児科学的検査は完全に終了し、後遺症と認めるべきものは絶無である」と発表しました。

岡山の親たちは、我が子がこんなに苦しんでいるのに納得できないと、母親が中心となり母親大会で被害児の現状を訴える事にしました。１９６０（昭和３５）年8月２０日の第６回母親大会へは、赤松婦人部長にお世話いただき、岡山から吉房・浅野（お母さんが３１才のとき）の二人が東京に行き、岡山県の問題として森永ひ素ミルク中毒の被災児の現状について、内容はすでに覚えていませんが、５年間の苦しみを一心不乱に語りました。母親大会では、すでに終わったと思っていた被害児の現状をあらためて知らせ、衝撃を与えましたが、マスコミの反応はありませんでした。また、中山マサ厚生大臣と面談し被害児の現状を訴えました。その後、森永乳業を訪問しましたが、大野社長は不在で常務との対談になり、森永乳業の配慮で、高級車に乗せてもらい皇居・東京タワーなどの観光もしました。東京での宿泊はちゃんとした宿泊施設ではなく、ソファで寝たそうです。

お母さんは、その後はもも・ぶどうの栽培等で多忙な日々を過ごされ、昭和４０年８月２３日の守る会１０周年記念集会には参加されなかったそうです。この１０周年記念集会では、執行部からの守る会解散の提案に対し、南正和さん、南常子さんご夫妻、岩月祝一さんなどから、強い存続の要望意見が出されたため、その場で急きょ役員会を行い、解散中止と全国一斉精密検診及び疫学調査の実施を決議し、大きな成果を残しました。

岡山県本部では、６０年記念行事で上映したＤＶＤ（親たちの想いを受け継いで）を一般に広められる内容に編集し直し、事件の風化防止に役立てたいと思っています。